2024 年度第 3 回スポじんサロン
2025 年 1 月 11 日（土）10:30-12:30
於：筑波大学東京キャンパス

動物の遊びから見たヒトの遊びの特徴

島田将喜（帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科）

現在の動物行動学においては、遊び行動の厳密な定義は不可能であるものの、いわゆる「バーガートの 5 つの基準」を満たす行動を遊びと見なす、という認識が定着している。この認識に基づく遊び行動は、動物界全体に広く見いだされ、遊び行動そのものの進化的起源はきわめて古いことが明らかにされてきた。人類の遊びは文化的に多様であり、カイヨワはこうした融通無碍な人類の遊び方を、基本的な経験の違いによって、イリンクス（眩暈）、ミミクリ（模倣）、アゴン（競争）、アレア（偶然）の 4 つに分類した。ヒトにもっとも近縁な動物であるチンパンジーは老若男女問わずよく遊ぶ。またその遊びのレパートリーは多様であり、一部は文化的行動としての側面をもつだけでなく、カイヨワの 4 分類の要素すべてを見い出すことができる。こうした事実は、約 700 万年前に存在していたヒトとパン属の共通祖先が遊びを通じて、現在の私たちと共通する経験を得ていた可能性を示唆する。一方、人類の遊びには、動物には見いだされない特徴があることも事実である。本発表では、霊長類と人類の遊びの比較を通じて、人類の遊びには普遍的に見いだされるものの、動物の遊びには確認されていない特徴を挙げ、そのことのもつ人類進化史上の意義について、私見を述べる。